

---

# 俺の青春を返せよ！！

天鳳院 刻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の青春を返せよ！！

### 【Nコード】

N8724N

### 【作者名】

天鳳院 刻

### 【あらすじ】

主人公「切臥 立杜」（きりが りゅうと）は政府が経営している学校に通っている。

そこは、地球や、現界ですむような狭い所ではなかった。

そんな立杜のドキドキ青春を書き綴る所です

## 政府からのお手紙【1】

「はぁ・・・」

ため息がでてしまった・・・。

そんな言葉を聞いた隣の男が「何でため息すんだよ」

と、不機嫌そうな顔をする。こいつの名前は「灰」（かい）藤本灰だ。

「だってさ、俺明日でコノ屑学校でおさらばだぜ？」

ゲームをしながら「灰」が言う

「ああ、何だっけ…え〜と・・・ああ！！クソやられた！！」

以上に間が長いうえ、話題が変わった。ゲームに負けたのか中断したのかわからないが、コツチを向いて話す

「立しゅうお前まへえあれだろ。・・・昨日だっけ？政府から手紙、つーのが来たんだろ？」

「ああ」

「それで、学校が変わっちまうんだよなー？」

「そうだよ。まったく何なんだよ。めんどくせえ」

そう言っつて俺は立った。メールを確認する・・・一通届いてる。俺は見ずに閉じた

「そついえばさあ、その政府の手紙にやあ、何て書いてあったんだ！？」

灰がゲームをしながら俺に話しかけてくる

「えーっと…。政府の学校に来いってのと、迎えにくるんだって」

「はあ！！？？迎えに来んの！！？？何がああ」  
ゲームしているせいだろうか…うるさい

「政府の奴らが迎えに来んの！！」

数秒たった…。

「じゃあ、あれだな。…まあメールはするぜ？」

寂しいんだろと言ってやりたかった。だって俺たちはいつもあの屑学校でワイワイやってたり、夜遊びだってした。それで先公に週一くらいで怒られてた。

…どっちかっていうと、俺の方が寂しいんだろうな…お前との過去なんて振り返るくらいなんだから。

「ああ、俺はそのメールを楽しみにまっしておくよ」

「おう、任せとけ！！」

そんな言葉が嬉しかった

「ってかよお。明日お別れパーティーしようぜ！！クラスの全員呼んでさ 皆よろこぶと思うぜ？男子はぜったい全員くるぜw」

「あははは。めんどくせーよw」

そんなくだらない会話を何時間かして 俺は帰っていった

そして何事もなくご飯を食べたりテレビみたりして 眠りにつこう  
とした

一つのメール着信を無視して・・・

## 転校生活始まる【2】

ふと、目がさめた。俺はトイレにいこうと素早くおきて階段を下りていった

階段を降り終ったところだった

「困ります!!立杜はいないんです!!」

母の声だった

「俺は、ここにいるよ?」

黒いスーツをきた黒人の男二人が玄関にたっていた  
母と男たちは、俺のことを敏感に察知して 眼をとばしてきた。

「なんだよ?」

そう言った瞬間、男達が土足であがってきた。

「なんで!?立杜を返して!!お願い!!」

母がそう言っている内に、俺はパジャマのまま、男たちに連れて行かれた

「はなせよ!!てめえら!!」

力自慢の立杜なのに、赤子の手をひねる様にねじ伏せられた

気がつけば車の中だった

俺は朝から頭に血を上らせたため、少しつかれていた……。抵抗  
何て無駄だと端っから思っていた  
そんな心があるから、俺はうとうととして眠りについた

あれから何時間たっただろう？

俺は起こされた

「起きてください。おつきになられました」

堅苦しい言葉だ……。と思いながら車からでた

外の光が眩しかった。そしてそこで目にしたものは途轍もなく大き  
な建物だった。東京タワーどころの大きさじゃなかった。

「でけーな」

とっさに言葉がでた。そして俺は男たちがスタスタと歩いていくほ  
うに進む

大きな門が前回に開いてあった。その中に男たちは入っていく  
少し歩くとカウンターがあった。そこでは受付の女の人が二人座っ  
ている

そして、真っ直ぐ進むと広場に出た。そしてまた歩くと今度はいく  
つものエレベーターがあった

エレベーターの前にマットが敷いてあった。その絵は「人間」と  
書かれていた

他のも見ると、読めない文字があった。

1分くらい待つと チン と音が鳴り扉が開いた

「校長室および政府関係室へ、行きます」と男がボタンを押した後  
に言った

長い・・・こんなにも長くエレベーターに乗ったのは初めてだった

「おい、まだかよ」と俺が言うと、男が

「もう少しです。おまちください」

と、言った

こっちは、つつ立ってて足痛いんだっつーの！

扉がゆっくりと開いた

そして、見たのは奇妙な文字が沢山書かれていた扉だ  
趣味悪いくな。なんて心でつぶやいていた

「やあ、立杜君だね？入っていいよー」

元気そうな叔父さんの声が放送でながれた

俺は敬語じゃないことに少しイラつきながら扉を押しした

扉が開いた。初めて見る光景だった。扉だらけだった、四方八方扉  
だらけ・・・。キモイ

すると急に目がかすんできた・・・一瞬の間だった。急に部屋にた  
どりついた・・・。

「は？」そんな言葉がでてきた。

「うーす。立杜君いらっしや い」

どこからともなく声が響いた。姿がみえない。

「そんなにキヨロキヨロしなくてもいいよ。私の体はみえないか  
ら」

意味が解らなかった

「あつ、そうだ。エレベーター乗るの長かったでしょー？足疲れた

だろうからソファアに座つていいよ。今飲み物もつてくるから

うるさいやつだと、思いながらソファアにすわった

「ぶうー」

と、いう音が鳴った

「あははは。ひっかかったー。ブウブウクッションだよー。」

俺はそんな言葉が腹立たしくなりテーブルにおもいつき蹴りをあ  
たえた。小物が割れたが気にしなかった

そしてそのまま テーブルの上で足を組んだ。

「態度がわるいね。はい。紅茶」

すると、急に紅茶があらわれた。俺はそんなことよりも話をしたか  
った

「あのさ、なんで俺はココにこなきゃなんねーの？」

少し間があいてから、話してきた

「立杜君、ココわね。政府施設だよ。日本になくて世界にもないん  
だ。」

「はあ!!??」

意味が解らなかった。日本になくて、世界にもない?じゃあどこに  
あんだよ

「ココは、すべての界<sup>かい</sup>が集まるカールという世界なんだ。君が存在  
していたのは現界という世界なんだ。まあ簡単にいうとココは、不  
思議ワールドなんだよ」

不思議ワールドと言われたらなんか、理解できてきた

そして、次の質問にうつる

「どうして、てめえの姿が見えねえんだ？」

俺はまだ、イライラしていた

「私の体は見えないようになってるんだよ。簡単に説明しちゃう  
と、『透明人間』だよ。そしてさっき紅茶をテーブルに置いたでし  
よ?置く前は見えなかった、それはネ?私が触れたものは透明にな

るからだよ」

透明人間？はあ？理解しがたい……。それにテンション高くてうざい

俺は帰りたかった、あまりにも莫迦莫迦しくて、やってられなかった

「俺は、イツ帰れるんだ？」

考えてるようだった

「いつ？いつっていわれてもな〜……。わかんない」  
ついにキレた

「てめえ、いちいちわかんねえ事ぬかしてんじゃねーよ。現界だの透明人間だの莫迦にしてんのか！！？？」

「俺は理性を失っていた」

「立杜君大丈夫？怒るのはよくないよ〜。イツ帰れるなんて私だつて解らないんだから〜。もしかしてケータイのメール見てなかった？」

俺は思い出した。昨日灰と遊んでいた時ケータイにメールが一通きていたことを……

「メールみてくれなかったのお？じゃあ話がゴチャゴチャな訳だ」

あのメールは無視していた。題名に何も書かれていなかったから。

「まあ、とりあえず。私は校長だよ。ヨロシクネ。そして君は2年B組の生徒になるから」

校長だったのか……。こんなハイテンションな校長なんて最悪だ。そう、思い深いため息をすると校長が話しかけてきた

「立杜君、疲れてるんだね。部屋に案内するから明日までぐっすり寝るといいよ」

俺は返答をしないで、立ち。黒いスーツを着た男達の方へ、近づいていった

「部屋ってどこだ？案内しろ」

馴れ馴れしく言った。

「ご案内します」

と、言う言葉が正当でうざかった

「あ、立杜君、私物とか持ってきてないよね？特にケータイ」

俺はパジャマのポケットにケータイをいれていた。けどそんなことを言われると取られるような気がして、わざと違うことを言った。

「もってきてないけど？」

そういうと黒い男たちの足が止まっていたのに、動きはじめだした  
そして、さっき来た道を戻りエレベーターまでついた

そして何か・・・すんなり部屋に着いた

そして黒い男が

「明日、迎えにきます。着替えもあるのでそれをきてください」

そんな言葉しか覚えていなかった。寝たかったからだ。車の中で寝  
ていたがその睡眠時間では足りなかった。

おれはベットのの上に横たわり眠りについた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8724n/>

---

俺の青春を返せよ！！

2010年10月28日05時14分発行